発行日:令和7年1月5日　　電話:0120-087-052

第八十一号 会報 浄土真宗 太陽の会

「新年のごあいさつ」

新年のご挨拶申し上げます。

令和七年一月一日を迎え謹んで新春の祝詞を申し上げます。

太陽の会は、昨年新しい僧侶を迎えました。皆様とともに尊いご縁を喜ばせていただきながら、これまでと同様に安心のご供養をご提案しています。

本年も多くの年間行事で法要を予定していますので、太陽の会にお参りいただき、より良きご縁が広がりますようにと思います。

阿弥陀さまの光明の中、手を合わせていただき共に歩ませていただきたく思います。本年も僧侶、職員一同どうぞ宜しくお願い致します。

僧侶　江崎 宗一郎　師

「もちつき大会」

太陽の会では、今年も年末にもちつき大会を開催いたしました。コロナ禍で数年の開催がかないませんでしたが昨年から再開し今年も多くのお客様に喜んでいただくことができました。

参加された方からは「つきたてのお餅をはじめていただきとても美味しかったです。」と感想をいただきました。小さな子供たちの笑顔も見られ、子どもから大人までが楽しめる行事となりました。参加いただきました会員の皆様ありがとうございました。

「令和六年秋季彼岸会の報告」

○秋季彼岸会

秋季彼岸会を九月二十二日（水）に厳修し、多くの会員様と無事勤めることができました。

『安楽集』によれば古くより人の人生を太陽の軌跡を人生になぞらえ、朝日が昇る東に命の誕生を見つめ、夕日が沈む西に命が終わる死を感じていました。西方極楽浄土への往生を願うには最も適した時期とも言われます。親鸞聖人は、苦悩にまみれた私たちの生死を救いとってくださる阿弥陀さまのお念仏ひとすじの道を御示しくださいました。

亡き方へのご恩を偲び、共にお念仏させていただきました。

「令和七年　行事計画」

【 令和七年　行事予定 】

○本山（福山）
・報恩講　一月十六日(木)
　午前の部　開式　十時半～
　午後の部　開式　十三時半～
・春季彼岸会　三月二十二日(日)
　午前の部　開式　十時半～
　午後の部　開式　十三時半～
・花まつり　四月八日(火)
○竜王別院（広島）
・読経会
　一月十四日（火）九時～
　二月十二日（水）九時～
　三月十一日（火）九時～
　四月十一日（金）九時～
○川上太陽霊園(鹿児島)
・春季彼岸会　三月八日(土)

教えて仏事の事⑥
「法名は死んでからの名前？」

「お寺で法名をいただいたらどうか」と、ある門徒さんに勧めたところ「あれは死んでからもらうものではないのですか」と聞き返されました。「釋〇〇」という法名は死んでからの名前と思っている方が多いようです。確かに亡くなった時に、お寺の住職から法名をつけ、葬儀に臨まれることが多くあります。しかし、それはあくまで緊急の処置で本来の意味からすれば間違った慣習なのです。

そもそも、法名というのは“仏教に帰依した人の名前”（キリスト教のクリスチャン・ネーム、洗礼名のようなもの）で、お寺で行われる帰敬式（おかみそり）を受けた人に対して、お寺の住職から授与されるものなのです。つまり、「仏教徒としての自覚をもって生きる」という証の名前であり、生きている間に授かるべき性質のものです。

葬儀の時、導師の住職からおかみそりを行うのは、生前に故人が帰敬式を受けることなく亡くなったからで、本来の形ではありません。

「それでは葬儀の時も、俗名のままで良い」と言われる方がいらっしゃるかもしれませんが「亡き人は阿弥陀さまの救いによって浄土に生まれ、仏さまになられている」のです。そうした亡き人を偲ぶ時に、俗名ではなく法名がふさわしいのです。

ところで、浄土真宗では「戒名」という言い方はしません。なぜならば、戒名は自力での修行で悟りを目指し受戒した人に対して授けられる名前であり、自力修行行わず他力本願によって極楽浄土へと往生を目指す浄土真宗にはそぐはないからです。

まだ、法名をいただいていらっしゃらない門徒さんがいらっしゃいましたら帰敬式を受けられ生前に名実とも“浄土真宗の門徒”になってください。帰敬式は2回目の人生のスタートとなる儀式です。「おかみそり」を受け阿弥陀さまと親鸞聖人の御前において自覚をあらたにします。授かった法名は、仏さまのみ教えを拠りどころする人生の道しるべとなるのです。

「クイズ浄土真宗」

Q、一蓮托生の本来の意味に近いのは？

❶ 絶体絶命

❷ 倶会一処

❸ 付和雷同

「一蓮托生」は良くても悪くてもとことん行動を共にするという意味において使われているようですが、本来は阿弥陀仏の浄土に共に生まれ、その浄土に咲く同一の蓮の上で会うために身をゆだねるという意味です。つまり、ともに念仏を喜ぶ人たちが、死して後、仏となってなおも心を通じ合わせる心境を表しているのです。

これと似た意味になるのが「倶会一処」です。これは『阿弥陀経』に出てくる言葉で「念仏を喜ぶ身になって浄土に生まれれば、すでに浄土で仏となられている懐かしい人たちと、一つの処で会うことができる」という意味です。「一つの処で会う」というのは「お互いの心がぴったりと通じ合う」ことで、仏さまの心境でもあります。

「絶対絶命」は、体も命も極まるぐらいに逃げることができない状況のことですので、「一蓮托生」とことん行動を共にするとは意味が違います。また、「付和雷同」は、自分には見識はなく、人の意見に理由もなく賛同する事ですのでこれも違います。

「一蓮托生」も「倶会一処」も阿弥陀仏の浄土に関わった言葉ですので本来の意味に近い言葉になります。一蓮托生、共にお念仏の中で活かされる毎日を過ごして、臨終の後に西方極楽浄土で倶会一処再び先に往生された方に出会うことができるよう健やかな日々をおくりたいものです。

Q、一蓮托生の本来の意味に近いのは？

クイズの答え・②

「歎異抄（たんにしょう）を読む」

『歎異抄』は、親鸞聖人が亡くなった後、門弟の間に真実の信心に背く異議が生じたことから、聖人から口伝を受けた著者が、同心の行者の不審を除くために著した親鸞聖人の言語録です。

善人なほもつて往生をとぐ。
いはんや悪人をや。

釋蓮如（『歎異抄』第三条）

「悪人こそ救いのめあて
私こそ救いのめあて」

「善人でさえ浄土に往生することができる。まして悪人は言うまでもない」とある。この言葉は、常識的に考えれば、理解するのは難しい。

ここでいう悪人とは、煩悩だらけの人間のことであり、具体的には私自身のことである。この正しく生きようと思ってもそれが出来ない私こそ阿弥陀さまの救いのめあてなのである。

「九月～十二月のことば」

太陽の会では、館内入口・本堂入口に「月のことば」を掲載させて頂いております。お経は難しいと思われる方もいらっしゃるとは思いますが、身近なやさしいお言葉として皆様のお心で味わって頂けたら幸いです。

【九月のことば】

如来ご自身が阿弥陀仏となって
衆生の前にあらわれてくださった

「寺川俊昭」

親鸞聖人のことばに、「法身はいろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず、ことばもたえたり。」というものがあります。仏陀の覚った真理は、ことばや形として表すことができないものであり、仏陀の本性とはその真理そのもの（真如）であることを指して法身といいます。私たち自身についても、真理を如実に知ることが難しい存在であると受け止める事が大切です。「南無阿弥陀仏」という名号となり私たちにはたらきかけて下さるのです。

【十月のことば】

人間が人間だけでやっていく
現代の問題はそこにある

「安田理深」

あの人は良い人、悪い人と煩悩具足の私の基準は、しょせん都合の枠にしかありません。そしてその都合が真実でないゆえに、良い人が悪い人へ、悪い人が良い人へと、ころころ変化します。それは一対一の関係であっても大きな集団となっても、「人間だけ」の関係である限り同じです。仏さまを仰ぐ日常の大切さを多くの方に考えていただくきっかけになればと考えます。

【十一月のことば】

仏の救いのはたらきが
私の声となったお念仏

「内藤智康」

「下至十声」十回以上お念仏した者も、聞くだけの者も、救いからもれることはない、自力の念仏（呪文のようなもの）では全ての者は救われないが、親鸞聖人のお示しされた他力のお念仏は全ての者が救われる。「南無阿弥陀仏」とは阿弥陀さまのお名前です。この「南無阿弥陀仏」のお念仏が私の口から声になってでてくるということは、阿弥陀さまと私は一緒にいらっしゃるという証明となるのです。つまり、私がお念仏しているすがたは、必ず救うとはたらいてくださる阿弥陀さまと私が共にあるという救いの証明なのです。

【十二月のことば】

貴方の感じられている虚しさこそ
真実の世界への強烈な憧れなのです

「米沢英雄」

「それぞれの人生においてどこに向かって歩んでいくことが大切なのか。人間が人間らしく生きる方向性とは何なのか。」これは米沢英雄師において重要な問いなのです。人間は自分の死について真剣に向き合い人は死ぬということを理解しています。しかし自身が死ぬことには目を背けます。死にゆく私を理解しているので、命をかけるところに人は深い感動をおぼえます。気迫にあふれ感動を覚えながら一日一日を送る姿こそ、今回のことば「真実の世界への強烈な憧れ」なのです。